

広島県三次市（国内 58 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 5 年 1 月 11 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場周辺環境・農場概況

- ① 農場は山間部（台地）に位置し、周囲は山林に囲まれている。周辺地域には田畑とため池が多くあり、調査時、農場から 500m 離れた池にカモ類と思われる水鳥を 20～30 羽確認した。
- ② 当該農場は 2 階建てウインドウレス鶏舎 7 棟からなり、うち発生鶏舎は 1 棟が内部の壁で 2 鶏舎に区分され、計 8 鶏舎ある。通報時は空舎の 1 鶏舎を除き、各鶏舎（各階背中合わせ直立 4 段 7 列ケージ）で約 120,000 羽ずつの採卵鶏が飼養されていた。鶏舎は 6 鶏舎及び 2 鶏舎が集卵施設を挟んでそれぞれ前室部分の通路で連結されており、それぞれ鶏舎内作業担当者入口（更衣室）は 1 か所設置されている。

2 通報の経緯

- ① 飼養管理者によると、通常の鶏舎ごとの 1 日当たりの平均死亡数は 10 羽程度とのこと。1 月 9 日の朝の健康観察時に、発生鶏舎（通報時 405 日齢）の 2 階入口から 1 列目の排気ファン寄りの下から 1～2 段目の隣接する数ケージでまとまって死亡しているのを確認し、死亡鶏の周辺の鶏で沈鬱を確認したことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。食欲不振、産卵率の低下等はなかったとのこと。
- ② 調査時、発生鶏舎 2 階の発生ケージ付近に加え、同じ列の入気面側にも数ケージでまとまった死亡を確認し、これらケージの真下に位置する 1 階部分でも死亡を確認した。それ以外の鶏舎の鶏に特段の異状は認めなかった。

3 管理人及び従業員

- ① 農場全体の従業員は 25 名（技能実習生及び特定技能外国人含む。）で、そのうち 8 名が鶏舎作業に従事しているとのこと。
- ② 鶏舎ごとの担当は決まっているが、休日等には担当外鶏舎に入ることもあるとのこと。
- ③ 鶏舎内作業と鶏舎外作業（鶏糞搬出等）の人員は完全に分けられており、鶏舎外担当者が鶏舎内に立ち入ることはないとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 衛生管理区域周囲にはフェンス、公道から敷地内への入口には監視カメラとゲートが設置されていた。守衛が車両の入場を管理しており、来場者はインターホンで事務所へ連絡していたとのこと。発生農場及び隣接する系列の育成農場の共通の入口には、アーチ型の車両消毒設備が設置されており、従業員の通勤車両を含め車両消毒を行っていた。さらに、衛生管理区域への入口には施錠可能なゲートがあり、車両入場時以外は閉じられていた。
- ② 飼養管理者によると、従業員は出勤時、駐車場脇の更衣室にて全身の噴霧消毒後、場内専用作業着及び長靴を着用してから衛生管理区域まで移動し、踏込み消毒（逆性石けん及びオルソ剤、毎日交換）を行った上で区域内に入場し、区域内の担当業務ごとの更衣室にて再度衛生管理区域専用作業着及び長靴への交換、手指消毒を行っているとのこと。鶏舎作業担当者は、鶏舎入口の更衣室において全身消毒、鶏舎専用作業着及び長靴の着用、手指消毒を実施してから鶏舎に入場しているとのこと。鶏舎同士は前室部分でつながっており、鶏舎間を移動する際には踏込み消毒と手指消毒を実施していたとのこと。全ての更衣室はワンウェイとなっており、着替え前と着替え後が交差しない構造だった。
- ③ 飼養管理者によると、鶏舎内に立ち入る来場者は、応接棟にてシャワーインを行っているとのこと。事前申請なしの訪問は認めず、行動歴等を確認の上入場を許可して

おり、入場記録簿も備えられていた。

- ④ 発生鶏舎では、鶏舎手前側の壁面に入気パネル、反対側壁面に自動制御のシャッター式の排気ファンが備えられ、夏季はトンネル換気を行なっているが、冬季は入気パネルを閉鎖し、モニター屋根の入気口から天井インレットを通じて給気していた。入気口には金網（目合い2cm）が設置されているほか、冬季は、埃や野鳥の羽根が鶏舎内に入るのを防ぐためにスポンジ状のフィルターを設置しているとのこと。
- ⑤ 集卵ベルトで集卵した卵は、バーコンベアで農場内のファームパッカーに搬送されて原卵で出荷、又は農場内のGPセンターでパッキングした上で出荷していたとのこと。バーコンベアには覆いがあり、開口部にシャッターが設置されていたほか、コンベア下には野生動物対策のネットが設置されていた。
- ⑥ 鶏糞は、各鶏舎の除糞ベルトを週に1回程度稼働して場内の堆肥場に運搬し、コンポストで一次発酵、発酵槽で二次発酵を行い堆肥化後梱包、完成した鶏糞肥料は農場外の倉庫に搬出していたとのこと。当該堆肥場には、隣接する育成農場の鶏糞も搬入されており、搬入車両は育成農場入口に設置された動力噴霧器による消毒、車両消毒ゲートによる消毒を実施し、私道を通り堆肥舎に進入していたとのこと。鶏糞コンベアは外部への開口部がないように建屋で覆われ、搬出用ダンプ置場にも防鳥ネットが設置されていた。堆肥舎入口には防鳥ネットが設置されていたが、一部間隙が見られた。
- ⑦ 死亡鶏は見回り時に回収して鶏舎内のペール缶に一時保管し、除糞コンベア稼働時に鶏糞とともに回収してコンポスト処理していたとのこと。
- ⑧ 飼料タンクには蓋が設置されており、タンク下の計量器にはネットが設置されていた。
- ⑨ 水は井戸水に次亜塩素酸を添加して使用しており、不足する場合は外部から市水をローリーで搬入したものを使用していたとのこと。
- ⑩ 場内には定期的に消石灰を散布するほか、冬季は1日3回消毒液で路面消毒を実施していたとのこと。
- ⑪ 鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを実施しており、120日齢の大雛を隣接する育成農場から導入していた。入雛作業時に、育成農場側の車両運転手は車内から降りず、搬入作業は当該農場の従業員が行なうとのこと。直近の出荷は12月16日。
- ⑫ 育成農場との人や機材の共有はなく、入雛作業時や鶏糞の搬出入作業時には、車両消毒を実施していた。

4 野生動物関係

- ① 飼養管理者によると、地域的にシカとイノシシが多いとのことであり、調査時は、衛生管理区域外でシカの群れを見かけたほか、衛生管理区域外周フェンスの脇にイノシシの掘り返し跡を確認した。
- ② 衛生管理区域外周にフェンスが設置されており、フェンス下は更に細かい金網が張られていた。農場内でネコやイタチ等の野生動物を目撃することはないとのこと、調査時も痕跡は認めなかった。
- ③ 飼養管理者によると、鶏舎内でネズミを見かけることは多くないが、殺鼠剤と粘着シートでネズミ対策を実施しているほか、夏季は専門業者による駆除を行なっているとのこと。調査時、発生鶏舎においてネズミのものとされる糞やかじり跡を確認したほか、発生鶏舎とは別鶏舎の空きケージにてネズミの死体を確認した。
- ④ 野鳥対策として、鶏舎近くの林にレーザーを設置するほか、衛生管理区域内の植栽へのネットの設置や、鶏舎屋根へのてぐすの設置を行っていた。飼養管理者によると、対策を実施してから鶏舎上空でカラスを見ることはほとんどないとのこと。調査時、スズメ等の小型野鳥は確認されたが、カラスの飛来はなかった。

(以上)